

Title	「上古の禽獣魚形勾玉」の補説：附 史前の大珠に就いて
Sub Title	A supplementary essay on the bird or animal shaped beads (magatama)
Author	梅原, 末治(Umehara, Sueji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1969
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.42, No.1 (1969. 8) ,p.1a- 30
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	図版:禽獣勾玉類, 鯉節形大珠
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19690800-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

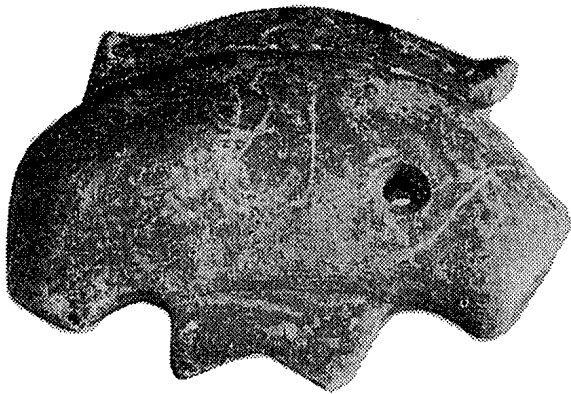
図版第一 禽獸勾玉類



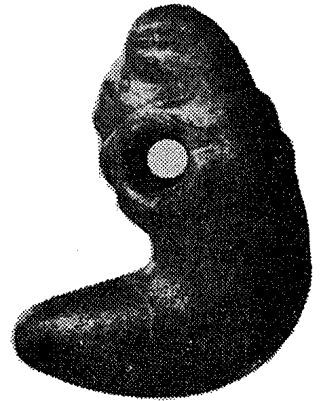
1



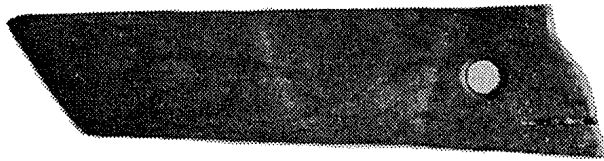
5



2



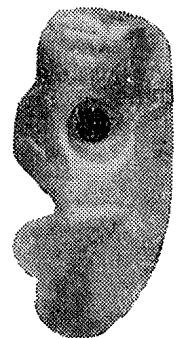
6



3



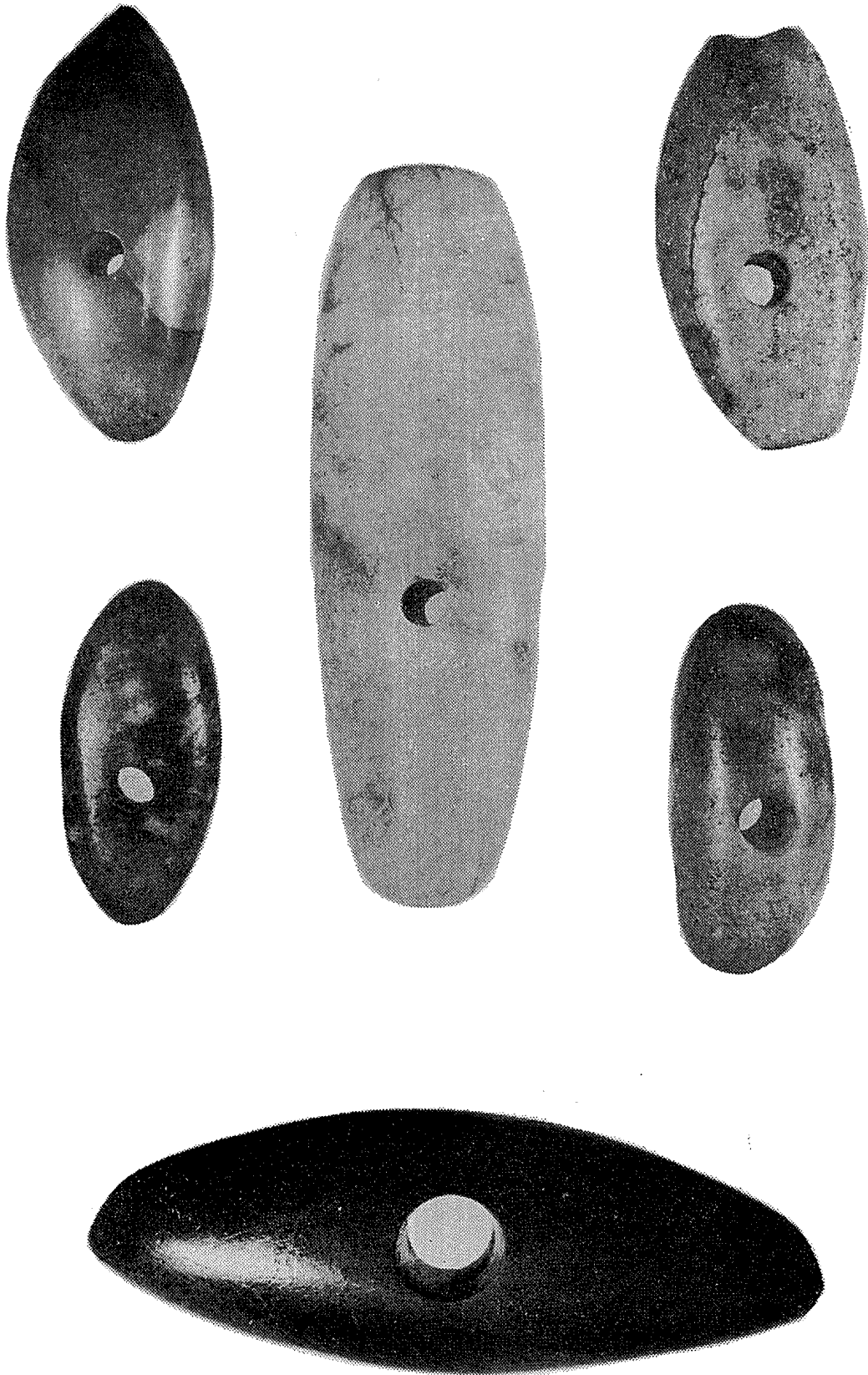
7



4

1 硬玉品 2 二彩獸形品 3 硬玉禽形品 4 亀ヶ岡出土硬玉品(京博蔵)
5 土浦町出土硬玉品 6 気仙郡出土品(以上辰馬氏蔵) 7 瑪瑙山羊(武田氏蔵)

図版第二 鯉節形大珠



上 硬玉品（藪田善一郎氏蔵） 下 碧玉品（梅原蔵）

「上古の禽獸魚形勾玉」の補説

附 史前の大珠に就いて

梅原末治

一

我が上古の佩玉のうちでその形が目立つて、而も夥しく遺存する勾玉のうち特に獸形に近い所謂櫛形をしたものゝあることは既に早く明治以前から一部好事家の間に知られていた。然るに此の種の玉類は明治維新の後、各地での土地の開発などの土工に依る古墳の掘開で他の副葬品と共に夥しい佩玉の勾玉が見出され、また考古の学が新たに興つたにも不拘、著しい出土例を欠いたことなどより、寧ろ異形の勾玉として取扱われることになつた。そして敗戦後になつて、各地での古墳墓の調査が自由に行なわれその発掘物が世に喧伝せられることになつた十年この方にあつても、依然現実に獸形の出土品は乏しいようである。然るに他方に於いて、出土地の所伝を欠いた既に古玩品化したものとなつてあるが、硬玉で作られた此の種の優れた遺品の伝存するものがあると共に、この十年來所謂弥生式文化期の出土品に同じ類のあることが新たに知られたのである。時恰も上古の遺物としての古玉えの巷間の興味が高まつて來たので、各地の民間に保藏されていた古く出土した如上の類が古美術商の手を経て世に出ることになつた。なお別に碧玉で作られた大きい獸魚形をしたものもあるのがはじめて知られ出して、それが古くから注意に上つていた所謂子持勾玉との先後の聯系を示唆することに

なつた。本誌の第三八巻第一号に掲載を請うた「上古の禽獸魚形勾玉」なる一編は、それ等王類の主要な遺品の実相を記して、それ等よりする所見に及んだものであつた。然るに此の種の勾玉類は、右の一文の終りに善田氏の秘蔵した多数の遺品を補記したように、爾後の三年間に於いて、更に各地での遺存例を加えて、うちに出土地の明確なものがあつて、殊にそれが関東地方より以北に於ける所謂縄紋式文化期に見る可き遺品があるのが知られた。さればこゝに補説を書いて終りに後者と聯関した所謂大珠についての所見を附記することにした。

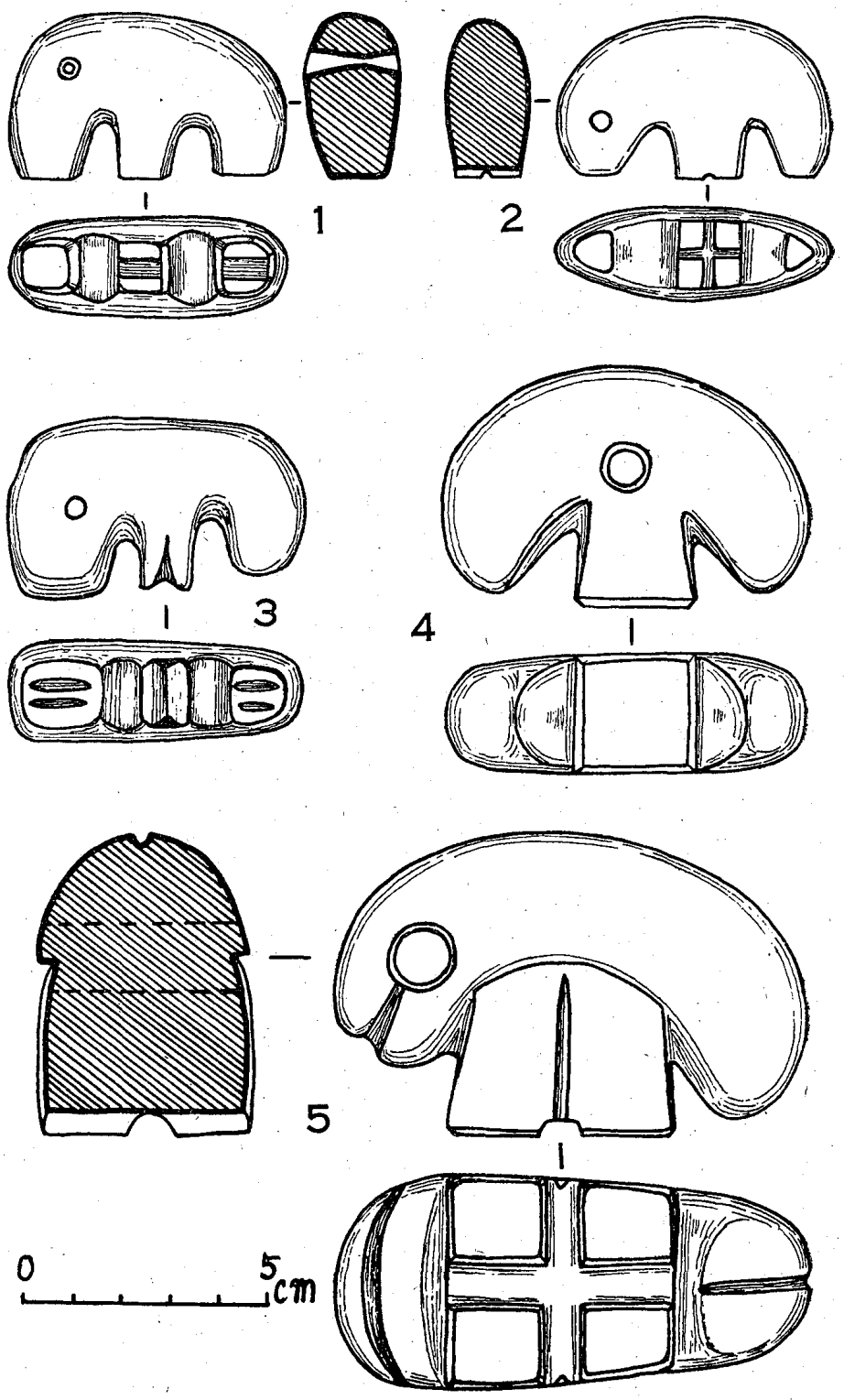
稿の初に當つて是等の資料を提供して自由な調査の便宜を与えられた諸氏、殊に辰馬悦蔵・樋口清之・松本信広・入江喜太郎等の諸氏と、その調査と挿図の描写等については京都国立博物館の鈴木博司氏の助成を受けることや、問題とする硬玉そのものに就いての京都大学の吉沢甫教授の数々の教示に対して厚く謝意を表す。

二

さて新たに知見に上つた禽獸魚形勾玉類で、多いのは固より獸形をしたものであるが、殊にそれは古く橢形と呼ばれた一類である。然るにこの種勾玉に良質の硬玉で造られたものゝ遺存の目立つことはすでに前文にも挙げたところである。

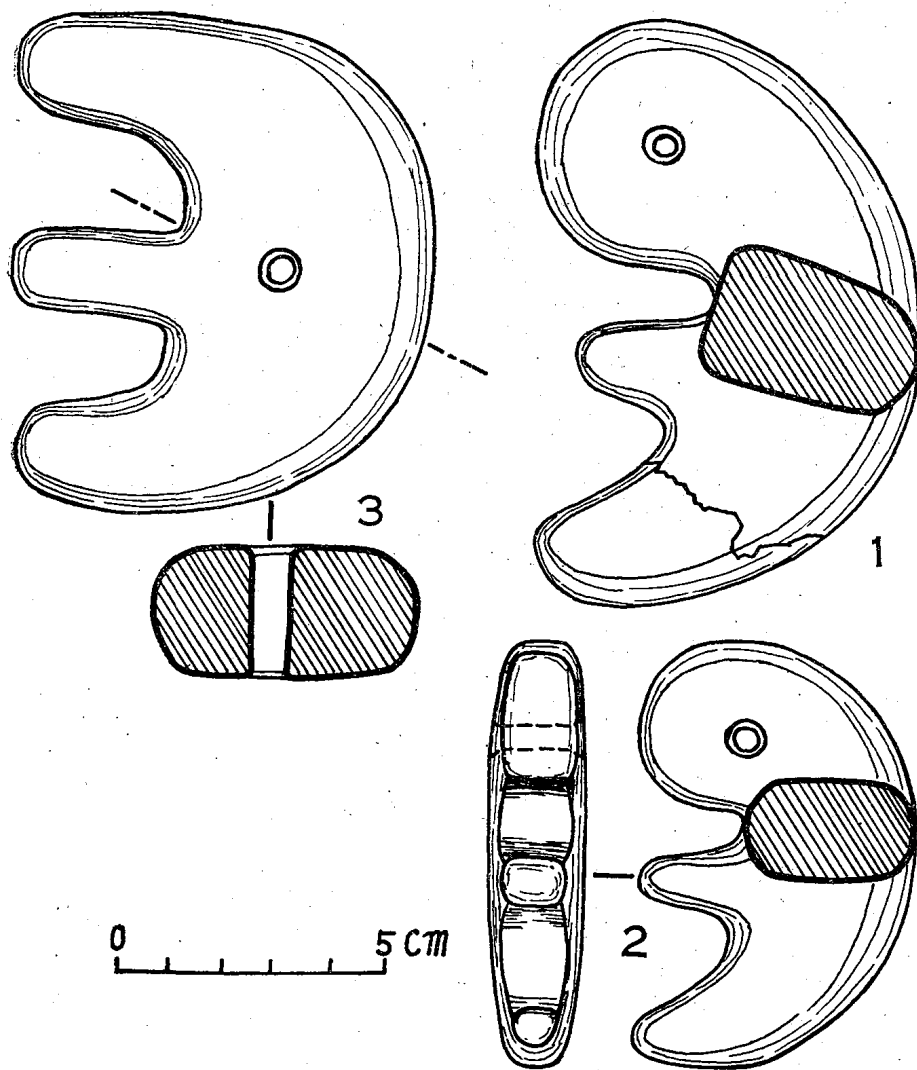
さて新たに認知したこの種の勾玉は、またその殆んどが既に出土地の所伝を欠如しているが、その遺品は奈良の玉林善太郎の齎した硬玉の二個をはじめ、入江喜太郎・星野武夫・阿形邦三等諸氏の取得品等が数えられる。中での玉林氏の一個（現筆者保管）は、長さ四・四センチの橢形としての硬玉の云はゞ標式的なもので、頭部に切目があり、腹部の突出した部分にもそれが認められて、形は整美で、面の磨研度も高い。阿形邦三氏の長さ五・七センチを測る一個は、頭部に切目がなく、頭孔は両側から鋭利な利器で穿たれてある。その内面の突起と尾端は平滑で、共に面に二条の刻線がある。体は不透明であるが、片側は青味を帯びていて固より硬玉と認められる（第一図の1）。入江喜太郎氏の一個また相似た頭部に切目

のない長さ四・六センチのもので、器腹の方形突起端には十字の鋭い刻線がある（第一図）
 ちで、同じく切目のない頭部はやゝ大きく、質は不透明で青味は一層すくない。その頭孔は向つて右側面の一方から鋭く
 穿たれてあり頭尾の面にそれ〴〵縦の凹条線が加えられてある（第一図）
 3。但し玉そのものはやゝ角張つて磨研の度は他の



第1図 所謂楕形獸形勾玉類形状図

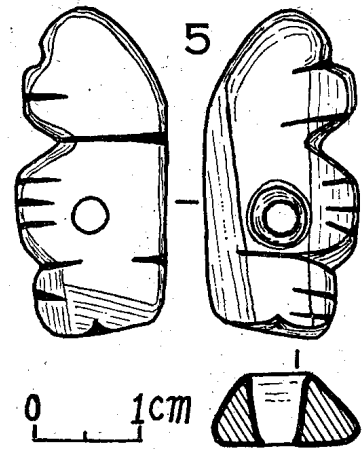
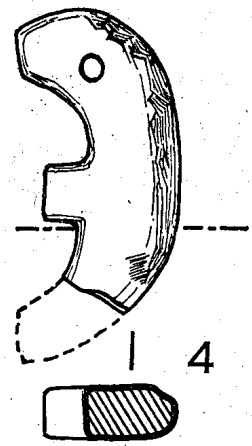
ものゝように充分でない。なお星野氏に依ると、氏は別に楕形勾玉で内腹の突起に刻みのない別の遺品を実見した言う。如上の諸遺品に対して同じ楕形の玉に他の材質を以てした遺存例がまたすくなく、うちに玻璃なり、碧玉・蛇紋岩



第2図 所謂楕形獣形勾玉と硬玉の獣形玉(1~5)

等のものを、新たに入江氏が主として南大和から獲得して、中に珍らしく彩釉の器まで含まれている。また出土地の所伝を伴うものに遠く離れた東北の青森県下で、古く出土した、その未製品と覚しいのがあるのは注目されることである。

是等のうちでの玻璃品の一は、気泡の目立たない半透明の帯淡黄色の白ガラス品である。玉の形は内腹の特色をなす突起が大きい方形をして、端の四方に面取りがあり、頭尾はほぼ均勢で、それは恰も茸の形に近く、体の中央に一孔を開くのは寧ろ異様である(入江氏保蔵)。他の径四センチの玻璃品(図版第一図の4)は、楕形本来の形により、近いもので、近年の新出土品たることを思わしめるもの。内腹の方柱状の突起端の面には十字を刻して、



第 2 図

て、その端の面に於ける十字の刻線は太く、両側面にもそれ／＼一条を刻してある。また頭孔の一方に口を表わした切目を、背と尾端にも条線を刻して、よく獣形たることを示す(第一図の 5 図)ものである。

奈良県磯城郡二宅村伴堂(トモドウ)の農家に分蔵されていたと云う大小十二個のうち長さ一二センチの大きい勾玉なり、玉形の相対向する双頭異形勾玉もある一のもの一括出土と認められる入江氏が昨四十二年初夏に収得したものに、また三個がある。楕形をした是等の玉は、他の勾玉類と同様な黒味がかつた蛇紋岩と覺しい質であつて、大小はあるがどれも形は大きい。先づ長さ一〇・三センチの最も大きい一個は、頭部が目立つて内腹の突起の尖つてゐるのは寧ろ玻璃の或ものゝそれに近い(第二図の 1)。長さ七・三センチの一個は、それと似ているが厚さ一・九センチの扁平形の玉は、よく磨研されながら縁辺は角張つたもの(第二図の 2)。他の一は長さ九センチを測つて、同じく扁平な通鉢の側面観は恰も櫛の齒に似て作りが一樣に細く、而も小孔は中央に穿たれてある(第二図の 3)。この玉は所謂楕形では形の可なり便化したもので、引いて他に較べて造玉の時代の下ることをそれ自体が示唆するのである。ちなみにこの点は同出の他の勾玉の類にあつても明らかに認められることでもある。

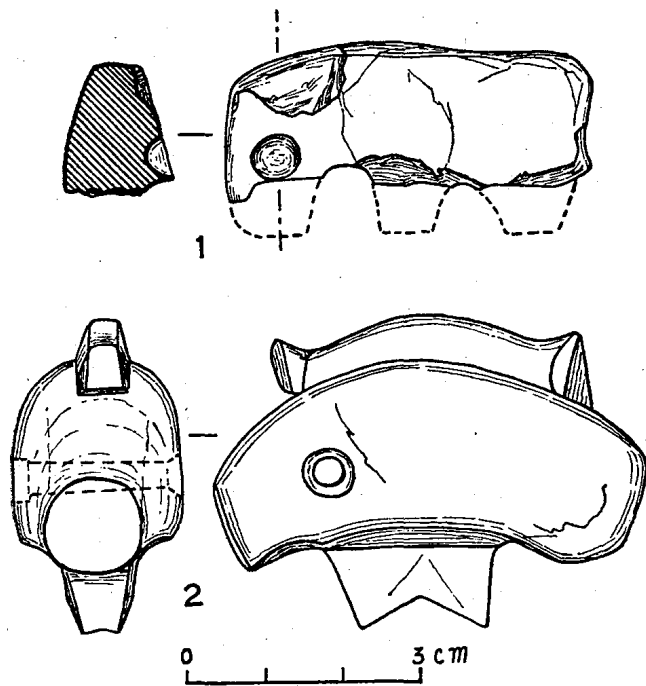
よく既往の硬玉品との同似を示している。

右の玻璃の玉とよく似て灰青色の碧玉で造作した長さ九・六センチの大きなもの(入江氏)がある。よく磨研されて全面の滑沢度の高い此の玉は、嚮の小文の後段に一括紹介したと同じ一類と見られるが、器形そのものは、内腹の方柱状が特に目立つ

次に此の類で出土地の明確な例をなすものに大阪市難波宮趾の発掘調査に当つて、その下層より出土した一個がある。尾端の欠けたこの玉は、現長約五・三センチの細長い曲りの寧ろすくない形で、内腹の中央に方形の突起が作られている。但し質は滑石であつて、背の部分のみは磨研しているが作りの粗なことが目立つ(第二図の4)。

更に作りの上で時代の下る此の種の玉として特に記すべきは、大和王寺附近で管玉と伴出したと云う緑釉を施した長さ僅かに一センチ半のこの形をした土製品であり、更に古い獣形を表した二彩の釉器である。

出土地の伝えを欠いているが、長さ五・七センチを測る此の二彩釉の玉は(図版第一の2)響に「施釉の勾玉」(『史迹と美術』で三三五号)で紹介した珍らしい同形二個の勾玉と胎土は固より施釉など全く違わないことから同一個所での同時のものたることを思わしめる。而も新たな出土品と認められる鮮かな土中古の趣を呈するもの。玉の形状は第三図の2の如くで、太い躰の下方に先の尖つた脚、また背にはきわ立つ突起脊を作つて、一見猪を想はしめる形で、それは上記大形碧玉品と相似していることも注目される。



第3図 二彩獣玉(2)と玉の未成品(1)形状図

以上のいろ／＼な遺品類と共に、こゝで挙ぐべきは既に触れた如く、この未成品が遠く離れた東北の僻地で出土している事実である。遺品は辰馬悦蔵氏が多年に亘る蒐集の古玉中の一であつて、明治三十六年の頃池上某が当時の青森県三戸郡川内村切谷内で採集したとある。長さ二・五センチの半ば破損した可なり軟質と見える材の粗末なもの、一見何であるかを見分け難い。しかし仔細に見ると、第三図の1のように、長手で角張つた形の背脊はほぼ形をなし

ているのに対して、他の側の破断した部分に、もと三個の突起を作ろうとしたとも見える形迹と、その一つの片側に円錐形の凹みがあつて、それは穿たうとした頭孔の名残と思われる点で、まさに此の種玉の未成品であろうことが推される。これは既往の新たな所見と聯関して記すべきである。

是等の新たに知られた所謂櫛形勾玉の一群は、上古の獸形勾玉のうちにあつての著しいものであること既に指摘したところであるが、如上の諸遺品に依つて、その中での既に一つの型をなしていたことと、この類が以後にも引続いて一部の間に作られて奈良朝近くに及んだことが二彩釉の遺品から認められるのは、現時点での通行の一般上古遺物の形式編年観を顧みるとき、それえの反省をも示唆するところのあるものと云う可きであろう。

三

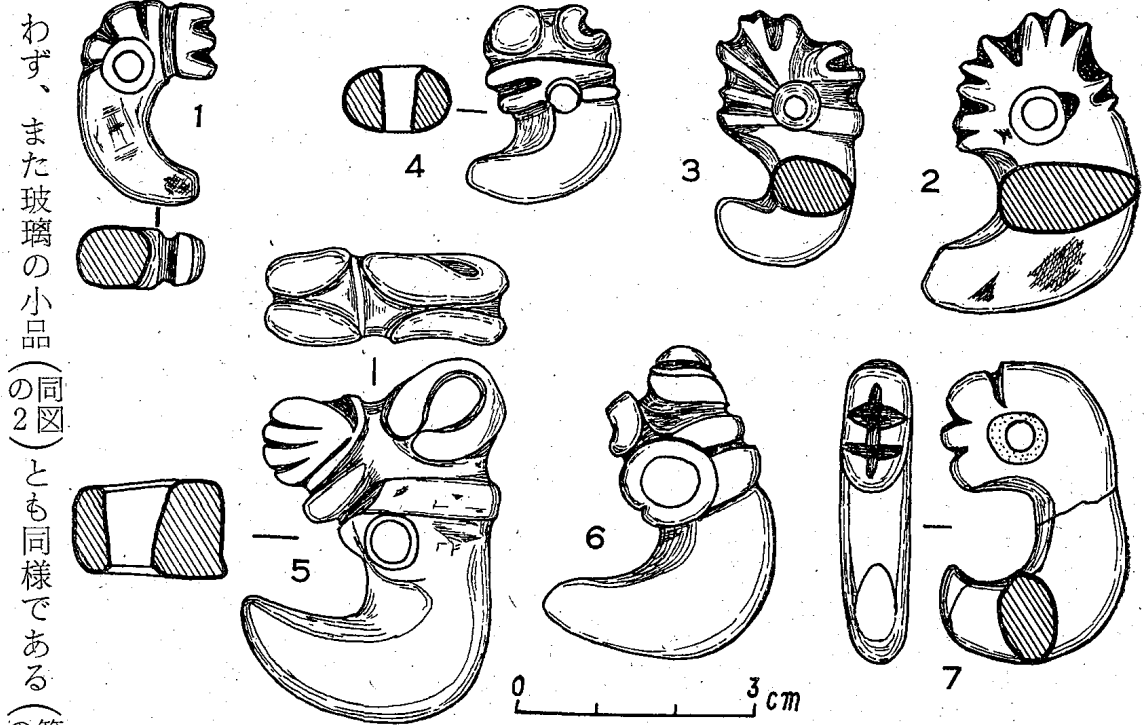
所謂櫛形勾玉に較べると、頭部が獸首をなす獸形勾玉類になると、より遺存が夥しく、古い丁字頭品との形式の先後の連系を示すものとなると、本州の中部の古墳から出た伝古品として新たに知見に上つたものがまた多い。それ等は硬玉など他の玉石での種々の形に互つていてこゝで一々挙げるにはあまりに煩瑣である。是等の遺品は依然としてなお遺跡から現実な新出土品に乏しいのであるが、その類が標式的な勾玉と共に、稀でなかつたことをよく物語るものでなければならぬ。

然るにもと上古の古墳出土の特色ある佩玉での勾玉の基づいたであろうとする是等の異形品としての類にあつて、其後新たに注意に上つたのは、中での頭部の禽獸形をしたと同様なものが、本州中部より以北の地区に於いて、夙に貝塚勾玉と呼ばれている出土地の明らかなものゝうちに、形のみならず作りの技巧でも同じ類の遺存することである。殊に、古い獸形の硬玉品で而も著しく面の磨滅したもののゝある事実である。この事実とともにまた既に嚮の本文で触れた朝鮮海峡を

隔てた南鮮の三国鼎立時代の後半の古墳墓其他より、同じ硬玉で作られた優れもの、而も全面の著しく磨滅して、当時にあつて伝存したことを思わしめる確実な出土例が知見に上つて来たことである。

さて特色ある縄紋土器の濃密な分布地区での貝塚其他から見出される点で、早くも明治の頃より一部に貝塚勾玉と呼ばれ、この国土での石器時代の目立つた佩玉たることが一般の通念のようになっていた硬玉をまじえた原始的な玉類に就ては夙にその集成がなされ、敗戦後では所謂縄紋土器様式の編年に基いて、その類の先後の年形式観の如きもほゞ動かないものとなつた観がある。そして右の見地より、その類に硬玉を含むことより、是等すべての硬玉の原産地の問題が取り上げられて、熱心な探求となり、越後の西辺で、原石が現実に見出され、つゞいて同地に程遠くない同じ越後の長者原の縄紋土器の分布地で硬玉の玉の製作を示すものゝあることが認められたのは、劃期的な新発見として大いに巷間の注目をあつめたことは周知の如くである。

たゞし玉としての硬玉 (jadite) の硬度其他の性質よりして、我が上古の夥しい古墳出土の勾玉での硬玉類の、いまや遺存の目立つこゝに対象とする禽獣魚形の類が、その造玉に当つて鋭利なる金属利器の使用なくして到底これを穿ち得ないのは余りにも自明なことである。このことは縄紋式文化の中期と認められる所謂大珠の穿孔の細部の細い螺線の痕跡を想起せざるを得ない。前文を書いてから親しく観ることの出来た出土地の明確な発掘品にあつて、古墳出土と同様な通有の勾玉と同じ類のもののあること、例へば神奈川県秦野市曾尾出土 (長三・二センチ、東京国立博物館蔵) 岩手県陸前高田市広田町一貝塚出土の大きいもの (長さ九・三センチ、慶応大学蔵) などはその禽獣と認められる目立つ遺品である。またその類は既に一部に知られた海を超えた韓半島にあつて、新たな遺存例が認められたのである。かくてそれ等の勾玉類は、たゞに嚮に説き及んだ所見を、より充足するばかりでなく、その性質観に新たに示唆するところのあるのを思わしめるものがあるのである。さればこゝに是等の遺品を挙げて特に補説するであらう。而して此の機会に、それ等に硬玉を以てし



第4図 本土中部以北出土の禽獣首形勾玉形状図

1. 東京都下沼部貝塚出土（国学院大学蔵品）
2. 神奈川県寸嵐出土品（同上） 3. （細見氏蔵品）
4. 千葉県左山町出土品（慶応大学蔵）
5. 茨城県土浦町出土品（辰馬氏蔵） 6. 宮城県気仙郡出土品（同上）
7. 青森県田子町出土（慶応大学蔵）

わす、また玻璃の小品（同図の2）とも同様である（第四図の2）。この玉とよく似て造作の巧緻なものに細見亮市氏の一個があ

たものが多いことに聯関する史前の時代形の勾玉と同似する顕著なものとして次の如きものが挙げられるのである。

一、先づ国学院大学資料陳列室に石器時代のものとして所陳の東京都太田区調布下沼部貝塚出土の長さ三・六センチの一個は、滑石かとも思はれる軟質の材であるが、その大きな頭孔を繞つて、外の周辺に彫線が加えられ、その形状たるやよく既知の獣首勾玉の通性を示すのである（第四図の1）。

二、同じ国学院大学の樋口清之教授が神奈川県津久井郡寸嵐^{スアラン}の遺跡で縄紋式土器と一所に得たと言う一個は、濃緑色の硬玉品である。長さ三・六センチを測るこの玉の体には、なお面に凸凹のある原石の名残をとどめているが、頭孔を繞る頭辺には鋭利な切目があつて、孔を繞るその頭辺に凡そ七つの鋭利なきざみ目が著しい。それは既に嚮の本文で挙げた玉林氏の瑪瑙品（その第一の○図の2）と殆んど違

る。玉の出土地は明らかでないが、もと京都佐伯氏が貝塚勾玉として珍重したと言うこの玉は、長さが三・五センチのまたほゞ似た大たきさである。体が丸くて尾部が曲つた頭孔を繞るその加工が目立つ(第四図3)。この玉の色沢は深緑の所謂琅玕である。

三、慶応大学陳列室に蒐蔵する数ある玉のうち、千葉県安房郡左山町沓見梅沢出土の一個は、色沢が深緑の前二個と似た硬玉で長さ二・六センチの小さいもの。形は丸い体がよく彫琢されていて、内側に近く一方から穿つた大きい頭孔があり、この孔の上辺は孔辺の左右にある太い二条の彫線と、前頭と背後に耳とも覺しい半環形を浮彫としている。尾端は尖つてやゝ内に曲つてある(第四図4)。

四、次に同様な硬玉の所謂獸形勾玉は、辰馬悦蔵氏の蒐集の玉の中にも著しい二品がある。その一個は茨城県新治郡土浦町出土の所伝を伴うもので、玉は長さ五・四センチの尾端の曲りが目立ち、且つ頭部の形状は複雑である。即ち扁平な原玉の名残をとどめたことを思わしめる角張つた玉の内側の上辺に近く、一方から穿つた大きい頭孔の縁などに可なり磨滅があつて、その上辺の所謂口部に当る部分は彫線の多い突起状をして、背後には耳とも覺しい長手の環状を表わしてそれは一の異彩をなしている(第四図5)。

宮城県気仙郡の海岸で拾得したと伝える長さ四センチの一個(第四図6)の質は、不透明な黒味の多い緑色であるが、また硬玉と認められる。玉の表面の肌はあれているが、同じく尾端の曲りが多く、とゞつた形のもの。頭部は上端が尖つてそれには恰も巻き上げた如き彫刻を加えてあり、頭孔は大きく縁に円形の線を繞らして、それ等がよく鋭利な利器での加工たることを示す。如上の頭辺の彫造の著しいものとは違ひまた材も白灰の軟質ではあるが、青森県三戸郡田子町野平下で出土した丁字頭の勾玉がまた慶応大学の陳列品にある。長さ三・八センチの、腹部で破断したのを接合したこの玉は、体が半環状に近い扁平な形で、一方から穿つた頭孔の前方に深い刻み目があつて、明らかに古墳出土の丁字

頭との同じものであり、なおその面に縦横の刻線を加えたものである（第四図の7）。

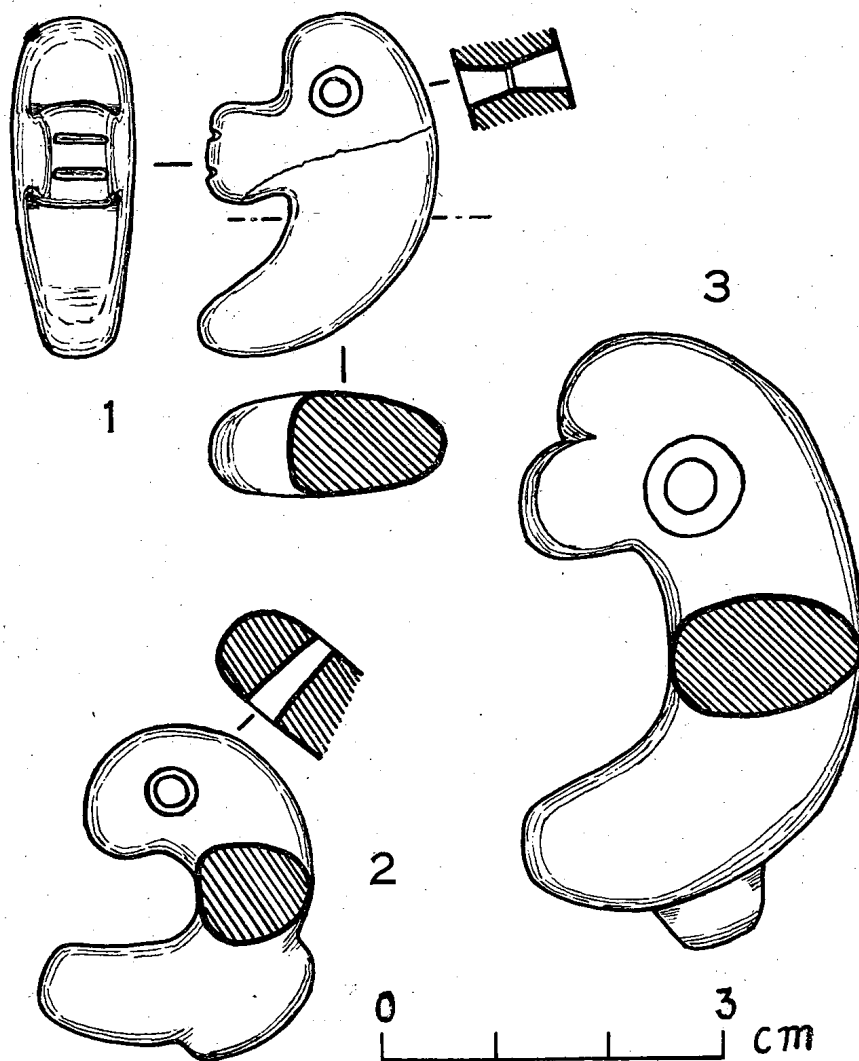
以上若干の遺品はその孰れもが既に本文で挙げた硬玉での同じ類と、形態なり作りを同じうすること甚だ明らかである。殊に技巧の点で肥前東松浦郡宇木汲田の古式甕棺墓出土の硬玉品と同様の著しいのを示すことである。従つて、作られた時代の如き既往のそれ等が縄紋式土器と同じ地点で見出されたに重点を置き單純に史前の時代のものとして、その土器の編年観でこれを判じているのは、上に触れた硬玉の問題と聯関して、まさに再検討される可きを、遺品それ実体が示すものと言はねばならない。

右の点で更に挙げる可き新資料に最近京都国立博物館の有に歸した一個の硬玉獸形勾玉がある（図版第一の4）。玉は有名な青森県西津軽郡木造町亀ヶ岡遺跡地区で、同地字平滝の中村鉄夫氏が蒐蔵していた同じ硬玉の小玉丸玉九個、亀ヶ岡式の色ある土器二個等と共に寄贈した由緒の明らかなもの。その長さは三センチである。

淡い均一な緑の色沢をしたこの硬玉の玉は、いま著しく全面が磨滅して、形の上に原材の名残をのこす角張つたところはあるが、第二図の5に見る如く、その獸形は本文で数例を挙げた、特に目立つた類とはゞ同じく、而も両面に刻線を加えた造形なのである。従つてこの獸形の玉は、造られた地区から東北辺の地区にもたらされたものであることをそれ自体が物語るものであるのは多言を要しないであらう。

五

次に所謂獸形勾玉での他の韓半島に於けるそれ等は、前者とはまたやや違つた類である。既に知られたこの種勾玉として先づ挙げられるのは、嚮の虫状に似た硬玉品（同前文挿図第一五の4）と同じ著名な慶州金冠塚の出土と認定される二個である。昭和十一年に当時の総督府博物館に公収の右の勾玉類は、昨春玉の来由を改めて検討した結果、新たにそれと認められるに

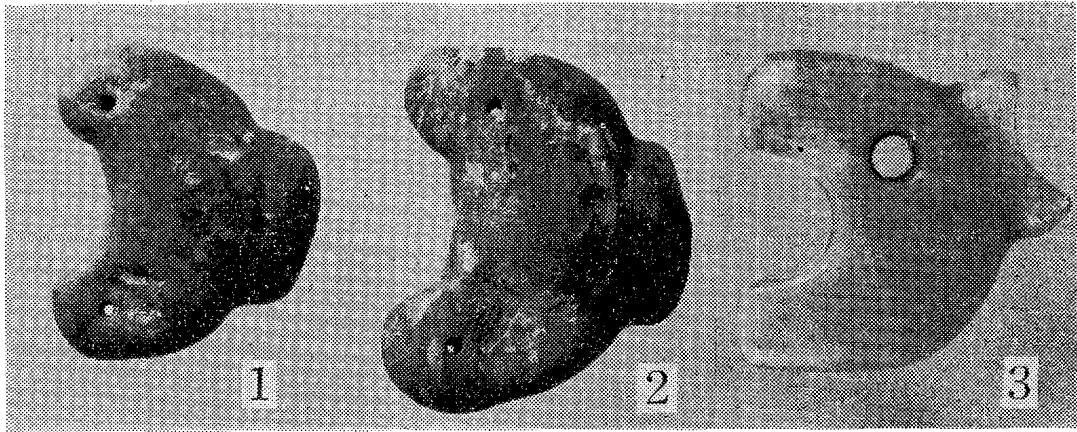


第5図 韓国慶州出土硬玉異形勾玉形状図
1. 2. 金冠塚出土 3. 仏国寺釈迦塔遺存

然るに右の後者と其の形を同じうして更に面の磨滅の度の著しいものが、一昨年検出された時代の下の慶州仏国寺釈迦三層塔に蔵置舍利の所謂装嚴具の一にまた含まれているのが明らかになつた。硬玉のこの玉は長さ五センチで、前者よりも大きく、尾端の外側の突起は小さくて、勾玉としてはより形が完好であり、その頭孔は一方から穿たがれていて、前には一条の切り込みのあるのが目立つ（第五図の3）。

至つたもの。ともに質のよい所謂翡翠品で而も全面の磨滅は共に可なり著しく、それから造玉後の伝世を思わしめること上記の亀ヶ岡の獸形玉と様相を同じうしている。ところが此の勾玉の一は、長さ三・一センチの頭孔の下方に大きな方形に近い突起を作つて、それに二条の刻線があり而も上頭のやゝ尖つた形である。頭孔は両側から穿つたよく見る所謂双頭円錐状をしている（第五図の1）。他の長さ三・七センチの一個は尾端の曲りの多い半環状の円い玉体の背脊の下辺に近く突起を作つたもの。その頭孔は一方より穿たれた、また既に例の少くないものなのである（第五図の2）。

大正十年の慶州金冠塚の出現以来夥しきを加えた南鮮各地出土の勾玉のうちに、同じ異形の玉のあるのは、既に前文で



第6図 韓国南部出土異形勾玉類

1. 2. 高麗大学博物館蔵 3. 小倉コレクション

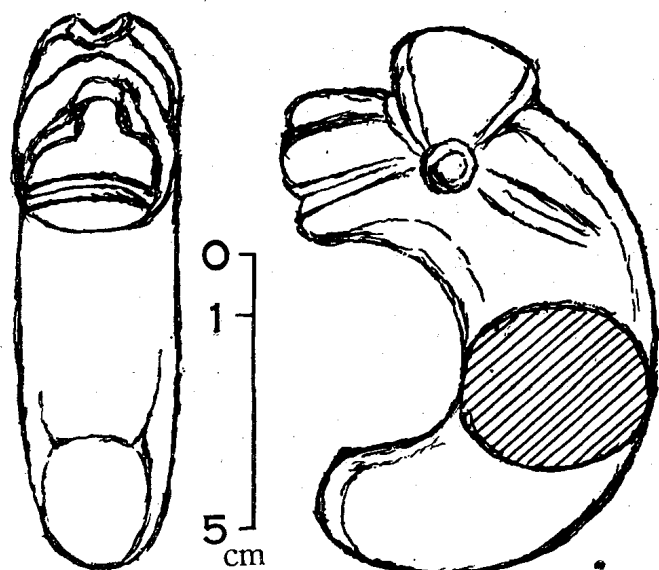
も触れたところで、背脊に恰も勾玉に似た突起を作った故小倉コレクションの慶州から出たと云う(第六図の3)もの、如きその完好な一例であるが、昨春戦後はじめての同地えの新資料の探求行に於いて、新たに知つたもの一に高麗大学博物館蔵する京城在住の金和鎮氏の寄贈したほど同形の二個がある(同図の1・2)。出土地の所伝を欠くが、長さ五・八と七センチの大きさの両者は、石質の粗な作りのものであつて、形は厚たい頭尾のほど同大の楕円体の背脊に長い突起を作つて頭尾に各小孔を穿つてあるのはまさに日本出土のものと同く違わない。

上に記した是等の古い異形勾玉類、殊に出土遺跡の時代の明らか、手なれの目立つものは、自から日本上古のその類が彼土に伝えられ異国の珠玉として珍重せられたことを明らかに示すものとせられよう。この事は同時に半島での勾玉の分布が現在なお南鮮地方に限られ、而も勾玉としての古い形のものとしては、最近報せられた扶餘と太田での銅劍・銅戈等の一類と伴出した古墓出土に係る共にもと球形のものを切断してその背に穿孔した異形品があるのみで、すべてがいづれも完成形の勾玉であること、相俟つて、上古に於ける特色ある我が勾玉類は、硬玉の問題とも連関して、古く勾玉が南鮮へ伝えられたまさに一つの重要なデータたるであらう。

この事象は中国の史書に明記されてある三国の魏朝に彼の国に使した倭人が貢物として大珠を齎らし珍重されたと見えることも併せ観ぜられるところである。

同じ別なデータとして形は普通の勾玉——うちに同じ双頭の相向う環状の異形品がある——で、北九州地帯で見出されているのと同じ范造の、而も内側にその名残の収縮を示す古拙な玻璃の勾玉類にあつても、それと全く同一の質なり形の遺玉が同じ高麗大学博物館に、晋州の朴在杓が蒐集したもの、うちにまた見られるのである。そしてこの玉の拓影は、現に辰馬悦蔵氏蔵する岐阜県旧加茂郡古井町上古井から出土したとある同じ二個の勾玉に、全く相重なる事実を特に記す可きであらう。

さて本土に於ける丁字頭勾玉との連関を示す、獸首形の遺品にあつても新たに知見に上つたものは固よりすくなくない。此の類にあつて、出土地の明らかなものとして挙げられる一に筑前宗像神社蔵の大島出土の硬玉の美事な完好品がある。



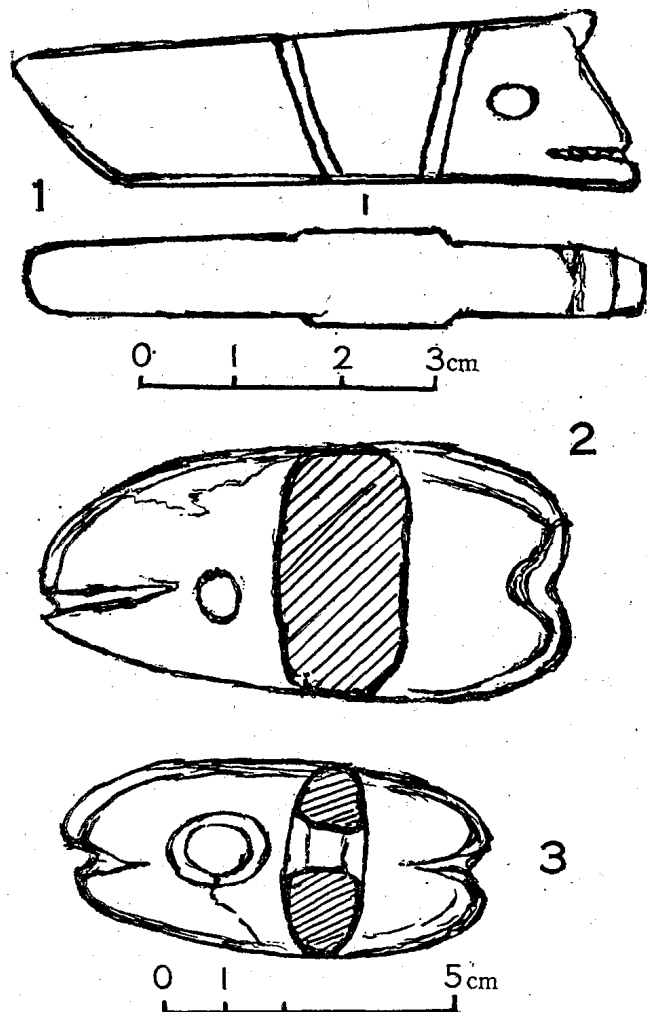
第7図 伝南大和出土玻璃獸首勾玉形状図

形がそれと似ているのは、広島市内の牛田西山貝塚（海拔二五八メートルの山頂にあるもの）出土品で、これは土製品である。玉は現長四センチ、尾端を欠いているが、胎土は良質で、形はととのうて、骨・銅・鉄の各種の鏃・鉄斧・鉄鉈・巴形銅器等に後期弥生式土器類が伴出、それは硬玉品と違つて此の種玉の一般化していたことを示唆するものであるのが注記せられる。勾玉の頭部が明らかに獸首をして、而も長さ九・九センチを測るその大形品に玻璃で作られたものがある（第七図）。この玉は南大和に伝存した同じ大形玻璃品の入江喜太郎氏の新収品であつて、その頭首は恰も獺犬の頭首を思わせるものがある。玻璃の質は淡青の鉛ガラスと覺しく、気泡はあるが均一な質で、他の大形品と同じく板状の素材を彫琢したものとすることをそれ自体が示している。従つてその造玉の時代は上記櫛形品の一同じく、おくれたものであつて、此の類もまた

後までも佩玉とは別個な意味で作られたこと、碧玉の大形の獣玉と同様であつたのが推されることである。

五

上來挙げて来た新たに実見した古い禽獸系の勾玉類に較べると、禽形をしたものはなお稀であるが、その一個は注目に値する。この玉は入江氏が求め得た出土地の明らかでない細長いものである（梅原保管）。全面が著しく手なれて造られて後の愛用を示すこの土中古の玉は、長さ五・三センチで、不透明な帯黄の緑色を呈するが、吉沢甫教授の鑑査では明らかに硬玉（jadiate）であること云う。



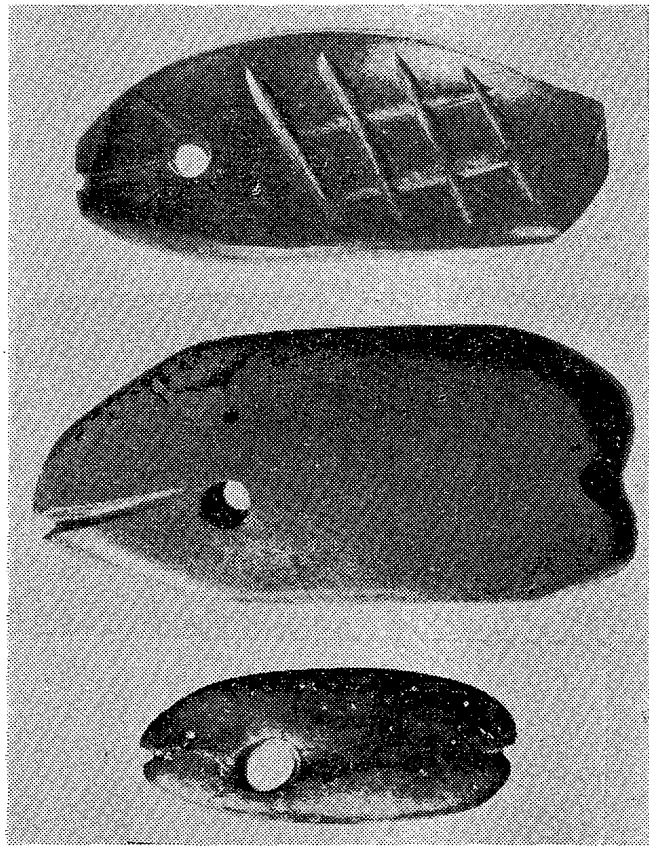
第8図 禽魚形勾玉形状図
 1. 禽形硬玉品 2. 碧玉魚形品
 3. 筑前山鹿貝塚出土品

上端に小突起、また下方に長い口部を刻し、その一面の切り込んだ部分に明らかに二個の歯牙を表はしたのが認められる。そして頭部につゞく部分は幅がやゝ厚く簡素な翼状をして、他端が長い尾に当ること第八図の1の如くである。それは古い禽形の一異例たることを示す。

次に魚形をした佩玉となると、嚮の本文で挙げた中で、その形態の明らかに魚たることの明らかな伝丹後国間人出土と伝え

る碧玉品とほゞ同形の古拙に見えるものが入江氏に依つて更に丹後方面から齎され、別にまた尾端の切込みが目立つて而も斜格子の鱗状刻紋もある前者に一層似た白い玻璃品を故藤木正一氏が新たに得たのを知つた。前者は磨研度の高い碧玉の長さ九センチを超えるもの。厚さ一・五センチの扁平な軀を彫琢して、長い体の一方に片寄つて片側よりほゞ等大に穿つた頭孔の内壁には螺旋状の利器に依る穿孔たることの痕迹が見られ、その前方の刻み目の下顎はやゝ突出してまさに口たること、既知のそれとの相似て、自から出土地の同じ所伝に思い及ばしめるものがある(第八図)。

然るに昭和四十年五月福岡県遠賀郡芦屋町大字山鹿字狩尾の山鹿貝塚の発掘調査が行なわれた際、貝層間に埋葬された遺骸の胸間に楕円形の玉器があつて、それが関東信越方面での所謂大珠との同似が問題となつた。ところで硬玉質のこの玉を、程経て実見したところ、また同じ類であることが認められるのである。



第9図 魚形古玉三例対照図
上・中 伝丹後出土碧玉品
下 筑前山鹿貝塚出土品

長さ七・五センチの青灰色の不透明で、若干の亀裂線の見えるこの玉は、扁楕円形の体にある大きな一孔の前後に切目のあるのは一見大珠に似ている。併し仔細にそれを観察すると、前後の切り目は明らかに鋭利な利器での加工たるを示すのみならず、大きな円孔は一方のやゝ下辺に扁在して、その全形たるや上に挙げた丹後出土と伝える魚形と合致する(第八図)の(3)。これは第九図の対照図で一層よく認知されるであらう。然りとすればこの魚形佩玉はいまや一般に云はれて

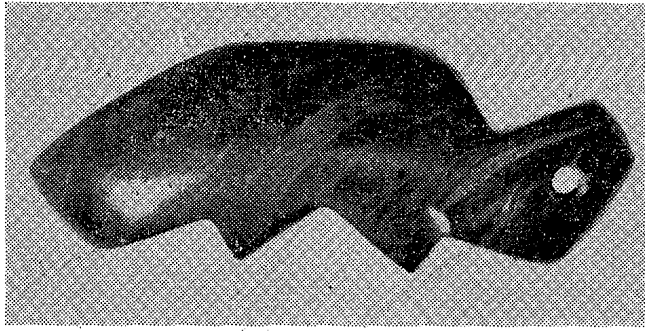
いる古く所謂弥生式文化の初期に既に造作されたものであつて、他の禽獣魚形の勾玉類についての既往の所見を強める考古学上の一の重要なデータと云う可きである。

なおこの古拙な山鹿貝塚出土の魚形玉が、現実に埋葬された遺骸の胸間に置かれてあつた事實は、玉が大形であることに併せ見て、嚮の本文に於いて可なりの碧玉で作られた大形禽獣魚形の遺例と質は違うが、またよく似ているのが顧みられて、当時それ等がすべて遊離したものであるが為に、形の上のみで推測したそれ等造玉の持つ意味をここに新たに思考せしめることである。即ちこの山鹿での明らかに示す胸間に置かれた魚形品は、被葬者のなお漁獵を生活の基調としていたらうことを思わしめることである。そして従来知られた古式古墳に多い碧玉品と同じ手法を示す大形品が、禽獣形を主とするが、また同じ魚形の品をも存することは、改めて同様に古い狩獵・漁獵の生活の伝統との強い連なりのあるのに思到らしめることでもある。

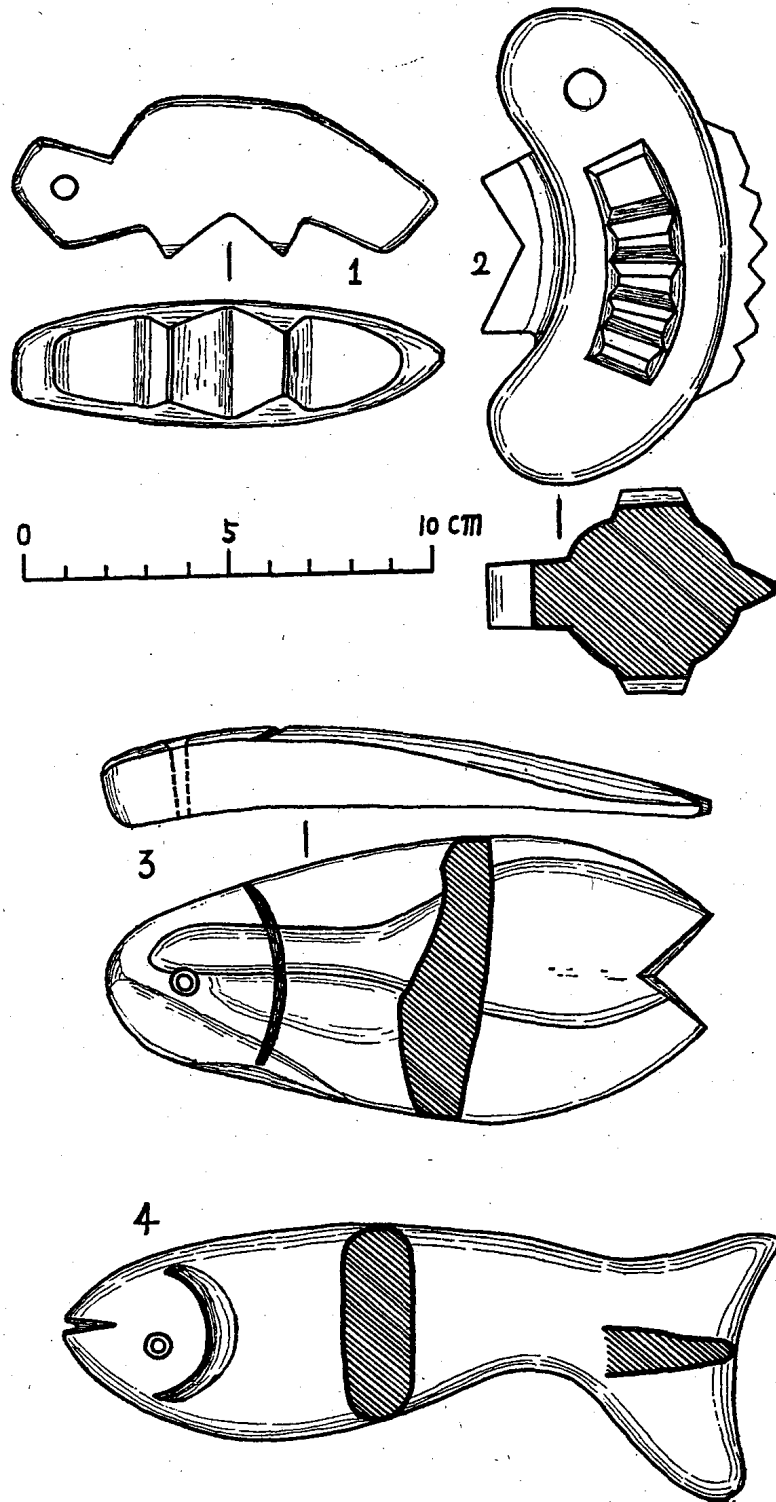
六

前稿の後半でそれまでに新たに知見に上つた大形で、而も彫像的であり、技巧の上でも古式古墳の副葬品を特色づける碧玉の石釧・車輪石類と同じところがあり、また他方で所謂子持勾玉と相似たところのある類として挙げた、同じ禽獣魚形の類にあつては、爾後の知見も依然として明確な出土地の所伝を欠く遊離したものに限られているが、またその数を加えて、うちに形態に見る可き遺品が認められるのである。

形の上で先づ記すべきその一は、入江氏が求め得た獣形品である。長さ一〇センチの濃緑の碧玉の一例は、第一〇図の如く、獣首が特に丸彫に造られ、背脊を示す突起と併せて古拙な珍



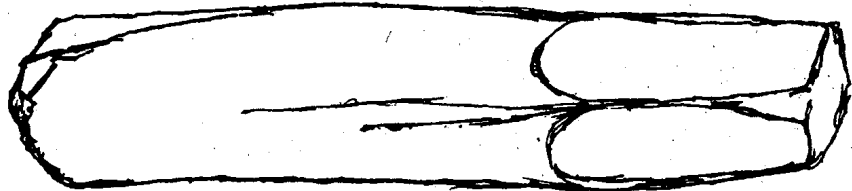
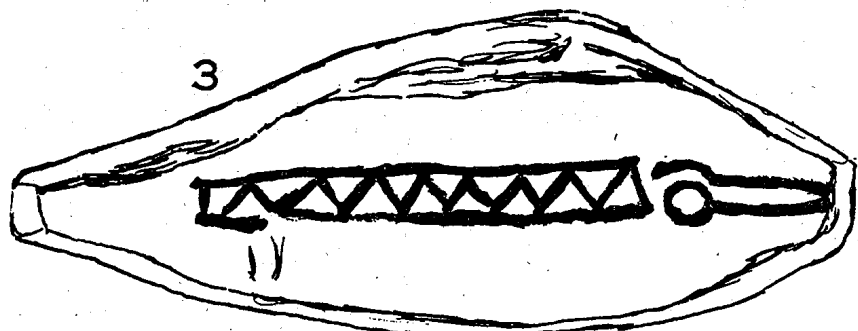
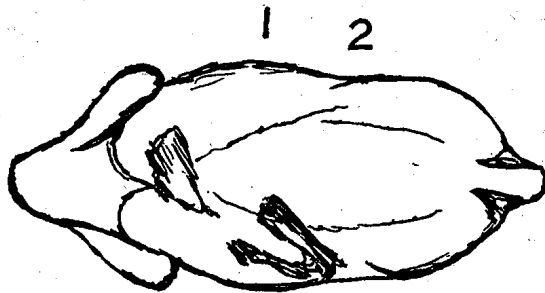
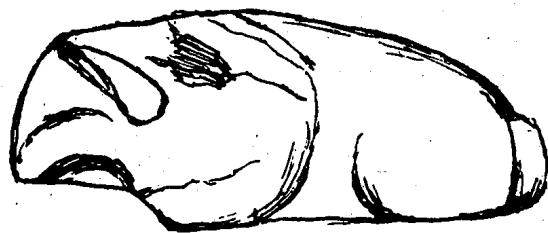
第10図 碧玉獸形玉



第 11 図 大形碧玉獸形玉及魚形品
 3. 瑪瑙魚形品 4. 玻璃魚形品形状図

らしい獸躰を表はし、而もその脚が三角状に突起してあるのは、既知のそれ等と全く違わない。この玉また丹後方面より将来されたと言う。

同質の濃い碧玉で造作された既知の子持勾玉に似た好例をなすものに、和泉忠岡町の正木孝之氏の新収品がある。玉は長さ一一・三センチの大きさで、曲りの少くない丸い躰は、その背脊と内腹に作つた突起に加えて、両側にある凸凹の帶状部に施した特色ある刻み目は殊に鮮鋭である（第一の一）。



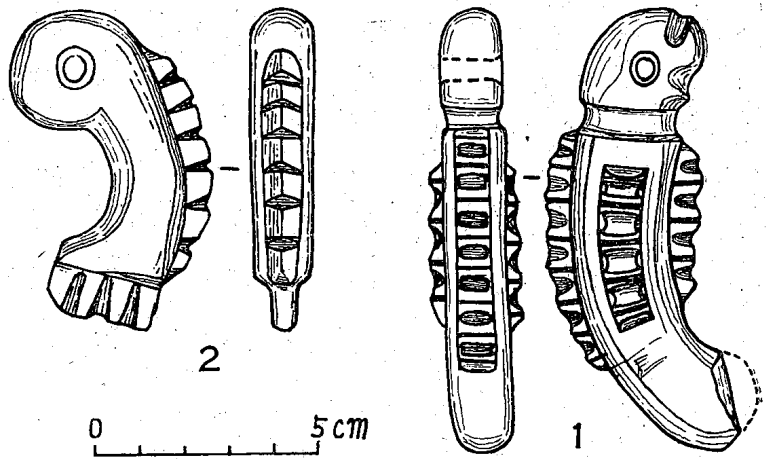
第12図 山羊形玉(1・2)と魚形品(3)

獸形を玉とした新たな遺品では瑪璃で造つた一雙の羊がある(武田長兵衛氏蔵)。長さ約一〇センチのほゞ同じ大きさで同時のものと認められるこの二玉は、穿孔などのない全く立体的な彫像で、四肢を折り曲げて踞したその形態は、中国漢代の羊玉に似て、その頭部の左右の兩耳なり、口辺の形は、突起状に作つた尾などよく山羊の像であることを示している(第一二圖)。その石質に亀裂なり、凹み等があつて、作行は中国の同種の造玉に及ばないが、造形では既知の遺品を超え

たものである。此の玉また出土地の所伝を欠くが、本邦での土中品であることはそのものゝ現状よりして疑う可くもない。相似た古玉では故藤木正一氏の以前から秘蔵した紅瑪璃の雛に似たものが挙げられるが、この一双の珍らしい山羊の玉は、古くこの国土で既知の碧玉品と並んでまたこの種の造玉の一部に行なわれたことなり、更に遡つてその類の基くところをも示唆する点で、重要な新資料たるであらう。

以上の獸形品に対して魚形をした遺品には、一部にまた亀裂の脉線の見える白い瑪璃品で南大和に伝存したと云う（入江氏所得）のがある。頭辺のやゝ厚い扁平なこの玉は、尖つたこの部分の小孔と、鰓の刻線がよく魚であることを示し、他端の尾には中程に深い切り込みがあつて、古拙な趣を呈する（第一一）。魚形での同じ粗拙なものは、長さ一六センチの青灰色の滑石と覚しい材で作られた厚手（三・五センチ）の扁平な遺品である（故藤木正一氏新収品）。これは細長い菱形に近い尾端の尖つた異様な形をしたもので、両面の中央にある山形波状の刻紋帯が目立つが、頭辺に眼と二条の口を表わす刻線があつて、魚たることが認められる（第一二）。それはまさに当時の民衆の稚拙な作品と見る可きであろう。同じ魚の形をした大形品にはまた南大和の旧高市郡鳥屋千塚地区で出土したと伝称する長さ一七センチの玻璃品がある。この魚形品は気泡の可なり多い濃褐色の鉛ガラスであること、従来同地区に伝存した巨大な勾玉の一群と全く質が同じく、その造作は均一な厚さの板ガラスを彫琢したもの。魚形は前者とは違つて細部の刻線などないが、現実な魚形である（第一一）。これ程ではないが大形の玻璃品は他にも見られる。ところで玻璃質の小形の魚佩は奈良の正倉院の宝库に遺存することなどと併せ観じて、固より時代の下ることを思はしめるのである。

形なり作りの上でそれ等の大形品と先後の関係があるとした所謂子持勾玉では、既に挙げた中間形に加えて、其後また新たな実例が認められた。兵庫県の舞子浜に近い有名な五色塚―前方後円墳の周濠の一部から新たに検出された二個が、その好例をなすものであるのをはじめ、大阪堀氏の収蔵に係る長さ九・五センチ（尾端小破）の如きも、首の部分を持状



第13図 子持勾玉及魚形勾玉

に薄く凹めていて、細長い体の四辺の突起帯は畝状の凸凹のある彫法を示すこと第一三図の1の如く、それは両者の中間的なものである。他にも同様な例があつて、いよ／＼その誤らざることを思わしめる。この点で故藤木正一氏が昨春得た、勾玉の体の三方にそれ／＼小さな玉を作り添えたものと一所に伊勢松阪在の旧家にあつたと伝える一遺品は、質は軟かな滑石ではあるが、背脊に刻み目を施した突起を作つたものであるに加えて、別に薄手に作つて幅を拡めた尾端に、条線を刻して魚尾を表わしたものであるを併せ記すべきであらう（第一三の2）。

七

以上はもとの「上古の禽獣魚形勾玉」で取り上げた玉の諸類について、同似を示す其後知見に上つた主なものを、嚮の順序に従つて解説したのである。さて是等の新たな遺品のいづれもが、嚮の同様な遺存品に即して推考したところをよりよく増益するものであるのは、それ／＼の記述で明らかである。而して同時に禽獣魚形の勾玉類が稀なものではなく、古くから広く行なわれたことをも一層よく示すのは、その補説たるであらう。但しこの種補記で改めて指摘されることは、もと古式古墳出土の硬玉での古い勾玉に若干の禽獣形があることから、発足した小考が、先づ既往の遺例の示すところ、一般勾玉での所謂形式編年観での丁字頭の類に先行することが推されたと共に、他方で其等よりも一層禽獣頭形をした遺品のあること、而も十数年来新たに調査せられた一般に時代が古墳よりも遡るとせられてゐる西日本の所謂弥生式文化期の古い甕棺墓に著例が見出されたことによつて、その来由の古く遡るものがあるのは彼の

肥前汲田の遺跡に於ける古拙な獸形の玉類から察知されるのは既に注記した如くである。ところで、この補説で新たに第三項に若干例を挙げた禽獸頭の古い勾玉類は、同じようなすぐれた技巧の硬玉品であつて、而も従来一般に繩紋式文化期の所産と見なされて来た本州の中部以北に於ける史前の地区に遺存するものであることは、この国土での硬玉の加工の問題と聯関して、新たに注目される可きであらう。

それ等の勾玉類は、遺例が現実に繩紋土器類の分布する地帯から出土していて、直接に古墳との關係の認められないものであることよりして、従来は同じ個所で見出される土器類と同時のものと解し、その繩紋式土器の編年觀に立脚して、玉の年代を推して来たものであつた。しかるにそれ／＼の玉の実体にあつては、記述で明らかかなように、西日本での禽獸首形品と形は固より技巧の点でも同似が顯著であつて、而も質の硬玉であることも同様である。されば此の場合、既往の所見は当然止揚される可きであり、進んだ技巧を示す中部より東北出土の是等の玉は、西日本でのそれ等とは別個なものではなく、その地域に繩紋式土器のな一般に行なわれていた時期に伝えられたと見る可きであらう。このことは青森県亀ヶ岡遺跡出土の手なれのある一個の獸形勾玉の如き、よくこれを物語るものに他ならない。そしてこれは既に触れた、彫琢の技術の實際の面と併せて、此の国土での重要な硬玉の問題と聯関するものであるが改めて顧みられることである。

そも／＼この国土での硬玉問題は、上古の古墳出土品に夥しいものがあるにもかゝらず、而も原産地の明らかでないところより、敗戦後、所謂史前の玉類にあつて所謂大珠の如き、その類に著しいものがあることより、国内に於けるその原産地の探求が大がかりでなされて、早く地質学上、その存在の認められていた地区での越後の糸魚川附近でそれが現実に見出されて世の注意を高めたのは周知の如くである。更に同地と遠くない同じ越後の長者ヶ平の繩紋式遺跡で現実に硬玉の製作されたことを示す未成品が検出されて、史前の時代に於ける造玉を現実に示すものとして大いに喧伝せられたのである。但し右の原産地なり、長者ヶ原遺跡の示す実状よりし、またそれに硬玉加工の技術の面を併せ考えると、この

国土での硬玉そのものが、もと外来のものである可きこと、是等の調査に執心した故藤田亮策氏の所論の如くである。殊に鄙見を以てするとそれは造玉の面で当然認められる可きこと上に指摘した如くである。

さて右の硬玉とその加工の技術がこの国へ伝えられた経路の如きは、現在にあつて固よりそれを推す徴証を欠いているが、蓋し嘗て大正の終りに故浜田博士がその『出雲玉造遺跡の研究』に於ける憶測と殆んど違わないであろう。併しその攻玉の技術の面となると、中国大陸にあつて、其後既に西紀前千二三百年代の殷王朝の後半に、同国での古文物中著しい所謂古玉があらゆる面で稀に観る發達を遂げていたこと河南安陽の殷代首都に於ける諸遺跡、殊に侯家莊西北崗の殷大墓群の學術發掘がよくこれを明確にしたのである。そしてその佩玉のうち形は違ふが禽獸魚形の類に著しいものが見られるのである。されば本邦でのそれ等はこの技術が伝えられたことが自から推される次第である。

次にそれ等の硬玉の原産地にあつては、既に浜田博士が推測された南シナよりビルマ方面に亙る地帯での玉質との同似よりし、なお、そのきめ手となる化学成分その他の検査は行なわれていないことではあるが、然かある可きものとして、右の攻玉の術と聯関して、その伝来について中国の介在がまた併せ憶測されることである。

此の点に就いて南西方に位置する台湾に於ける所謂史前の關係遺物なり、それと伴出する硬玉品の知見が新たに顧みられよう。先づ同地で有名な台北の円山貝塚では、細い円鑲をはじめ小形の鑿形石斧等硬玉品に見る可きものがあるのをはじめ、南端に近い高雄県林園郷鳳鼻頭の彩陶系の史前の遺跡にあつても、前年の大規模な學術發掘で、古い獸形品其他が見出されている。更に一九五一年に宋文薰氏が發掘した台東県東河郷東河（旧称馬武窟）の組合せ箱式墓に埋葬された遺骸の両耳辺に日本のそれと全く同じ玦状耳飾一雙が出土して、その一は明らかに良質の硬玉（径六・一センチ、他は蛇紋岩）であるのは、早く金関丈夫博士が報告せられている台湾西海岸墾土での長さ六・二センチの同じ組合せの石棺墓に遺存した細長い硬玉品が、蟬の著しく異形化したものと解せられることが、同質の小丸玉と共にまた挙げられるのである。是等

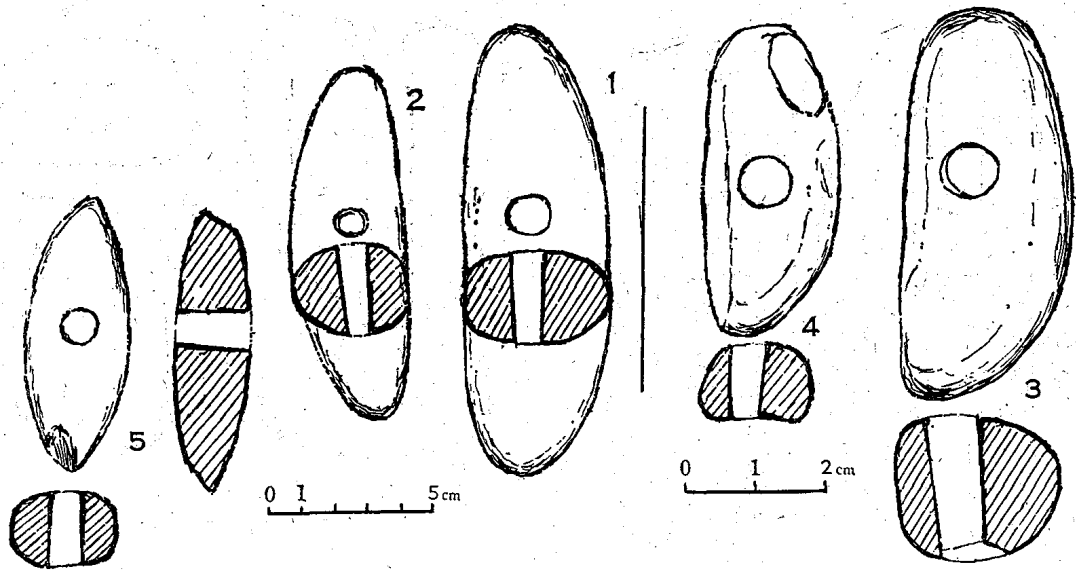
の硬玉品は他方で同島に大陸よりの所謂黒陶並に彩陶系の史前文化の波及していた事実なり、旧台中県大馬璘遺跡出土の石器類が示す古い銅戈の系統を受けた石戈のあることゝも固より聯関するものでもある。

然りとすると、問題とする硬玉の此の国土への伝来は、造玉の技術と共に西日本では、従来の遺品より一般に考えられるよりも古くて、同じく史前の時期にあつた。かくて現に見る所謂弥生式文化期に於ける禽獸魚形の著しい類の存在の一見異様に見える現象の蓋然性が認められることである。更にこの補説で新たに挙げた本州中部以東の所謂史前の時代とせられる通説に対しても、同じ類の早く史前の時期に硬玉とその攻玉術が併せてまた齎されたとする推測を裏書きするものであらう。

硬玉が早く史前の時代に西南方よりこの国土にその攻玉の術と共に齎されたとする点について、改めて注目せられるのは既に触れた。今日一般に所謂縄紋式文化の中期と認められる所謂硬玉の大珠と、その造玉の遺跡たる越後長者ヶ原出土品等の実物の示すところである。依つてこの機会にそれ等に就いての所見を終りに附記することにする。

附 所謂硬玉の大珠類に就いて

現在一般に大珠と呼ばれている硬玉質の遺品は、古く八幡一郎氏が特に存在を注意した両端の尖つて鯉節に近い目立つた形をした玉である。その種玉は終戦後になつて、史前文物研究者に依つて範圍を拡大する傾向となつて、硬玉での似た玉類を同一視し、時代観の上で、この国での硬玉の原産地の問題と結びつけて頗る重要視されることになつた。従つてこの類の玉の出土地の表なども度々作られ關係の論考が多いことは周知の如くである。たゞし、本来のその玉の形は、原玉の形に左右されたであらう、個々での大小をはじめ、その間に固より若干の差異はあるが、既に上に記したように、言

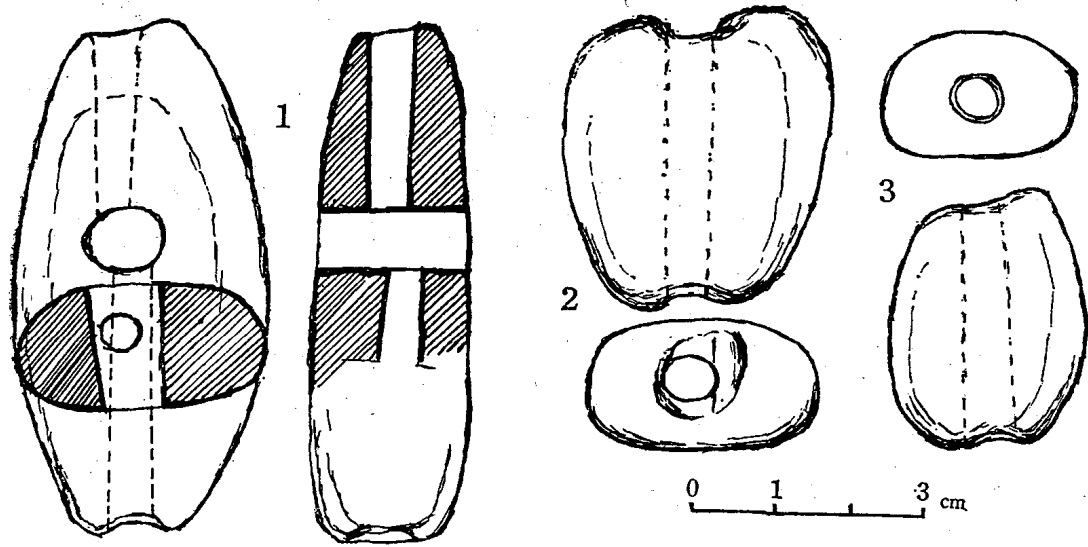


第14図 經節形の所謂大珠形状図

1. 群馬県沼田出土品
2. 長野県諏訪町出土品
3. 青森県亀ヶ岡出土品
4. 岐阜県神川村出土品 (以上辰馬氏蔵)
5. 碧玉大珠 (梅原蔵)

はば一つの定型をしているのである。そして是等の大珠の出土地が本州中部地帯から関東地方を主として、分布の上で所謂繩紋式土器との關係を示すものであることから、此の国土での夥しい他の地区、殊に近畿地方以西の硬玉品とは明らかに違つて見える。

ところで此の所謂大珠にあつても、既知のそれ等の他にもまたすくなからぬ遺品があつて、出土地の範囲も東北に及んでいる。即ちこの二三年間に私の実見した同じ大珠に於いて、例えば辰馬悦蔵氏蒐集に係る五個(第一四図の1、2、4) 故井上恒一氏の福島県野沢発見の一個、東北大学の二個の如きは、いづれも出土地の知られたもので、右の辰馬氏の一個は青森県の著名な亀ヶ岡遺跡での収得品と言う(第一四図の3)。また出土地は詳でないが、京都の藪田氏蒐集の古玉中にはこの類の完好品が五個を数え(二の上)(図版第)。奈良の赤井四郎氏の保藏品にも三個(尤もその二個は縦に孔の貫通した既知の同類としてはやゝ形の違つたもの)等がある。而もいづれもが殆んど、もと八幡氏の当初挙げた玉の通性をよく具えたものなのである。然るに是等の大珠にあつては、それ等が見出される地区がもと繩紋式土器の濃密に分布する点より推して、一樣に同じ時期のものとして、所謂繩紋式土器の編年觀に依像して年代なり性質が論ぜられて、現在ではかえつてこの特殊な玉自体の攻玉の面で



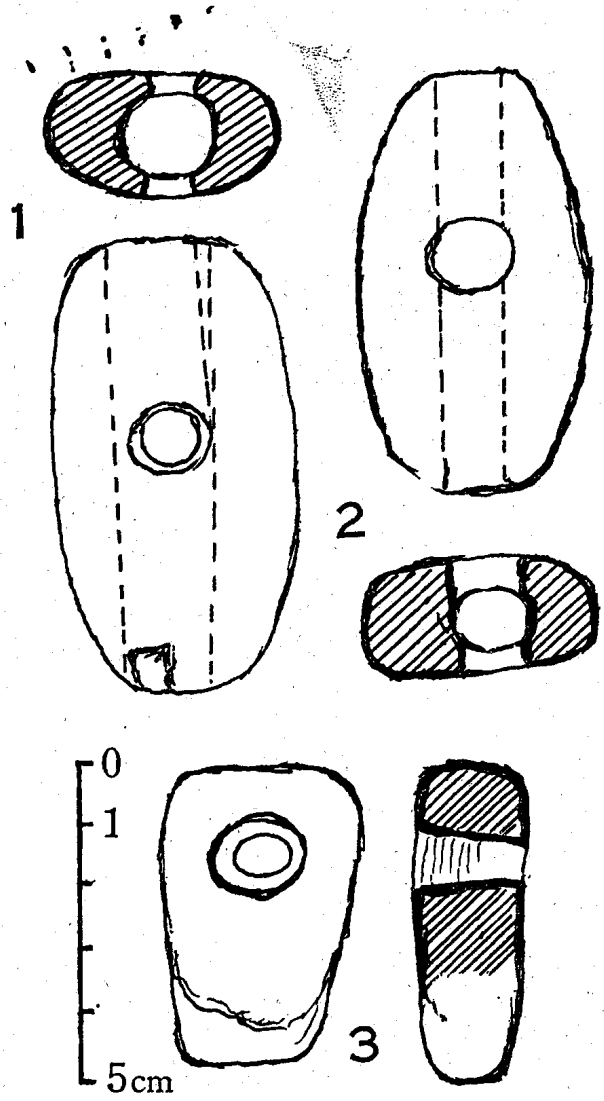
第15図 縦長の穿孔のある大珠形状図

1. 藪田氏蔵 2. 3. 赤井氏蔵

の考察は殆んど閑却された観が強い。

さて攻玉の面で当然省みられることは、所謂大珠類がその形の上で綜じて原玉に左右され勝な個々の大小はもとより他に差異はありながら、その多くの玉が、一様によく磨研されて既に一つの形をなして、而も体の中央に大きい穿孔のあることである。この穿孔には時に細長い玉に縦に穿たれたものもある。ところでこの穿孔で注意を惹くのは、孔の多くが一方より鋭く貫通していることで、その或者にあつては、更に細長い玉躰にも別に穿孔したものがあつた。それは例えば藪田氏の五例中の二個（第一五図の1）―その一は長さ七・一センチ、両端が平に作られたもの。他は長さ六・八センチで、両端はやゝ丸い。辰馬氏蔵の青森県南津軽郡旧山形村花巻出土品（長さ七・三センチ、第一六図の1）に見る如くである。是等の玉での細長い体の縦に穿つた、孔は材質の上より見て当然注目される可き点である。

所謂大珠の穿孔には、また別に細長い体の中央にのみ孔を穿つたものゝあること、例えば青森県松戸市上本郷貝塚（長さ七・一センチ、慶応大学考古学陳列館蔵）など既に知られているが、新たに知見に上つた赤井四郎氏所蔵の二個は、小さくて形は可なり違うが（長さ三・九センチ、第一五図の2。長さ三・三センチ、同図の3）その好例であつて、それぞれの孔は一方よりいづれもほぼ同じ太さで他端に鋭く貫通してある。



第16図 大珠の穿孔図
 1. 辰馬氏蔵・青森県花巻出土品
 2. 藪田氏蔵品
 3. 慶応大学蔵・福島県原町出土品

の穿孔のあるのもあつて、その穿孔の一つは、山形県牡丹平の一孔のように、両側から穿たれた所謂双頭円錐状のものであること、後の古墳出土の古い硬玉勾玉の頭孔に於けるそれと全く違わない。

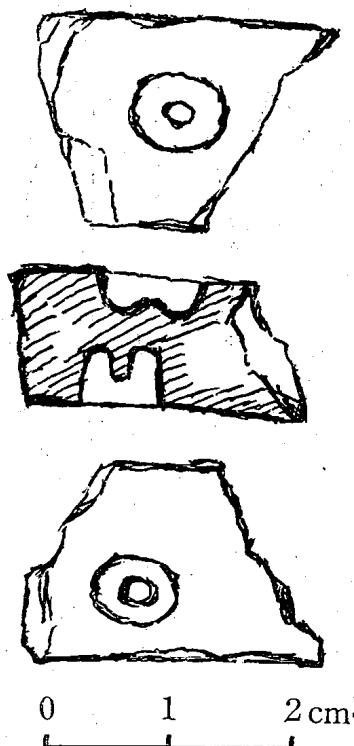
ところで硬度七を超えるかたい硬玉に穿たれた是等の大きい玉孔の多くが、一方から鋭く穿たれたもので、而も孔壁の内面を詳しく見ると極めて細かな螺旋状の刻線の痕迹をとゞめたものゝあることである。福島県原町市大道迫出土の可なり不整形品（慶応大学陳列室蔵、第一六図の3）、長さ一〇・三センチの標式的とも言う可き東京都八王寺市元八王寺三丁目所謂勝阪式土器片と一所にあつた大珠（早稲田大学考古学陳列室蔵）の如きは、右の内壁面のそれが特に顕著であり、他にもそのよく認められるものがある。

そもく硬度七を超える硬玉の穿孔、殊に上に若干例を挙げた縦に長い大珠の中央に穿たれたものなどの如きは、一部

同じ大珠ではまた別な穿孔のあるものとして、例えば慶応大学考古学陳列室蔵する青森県三戸郡石久井平貝塚から出土した縄紋式文化の晩期と云うその如く、数多く穿つたもの。また東北大学考古学陳列館収蔵の山形県牡丹平出土品（長さ八・五センチ）は、細長い体の両面の中央に凹みを作つて、それに二個

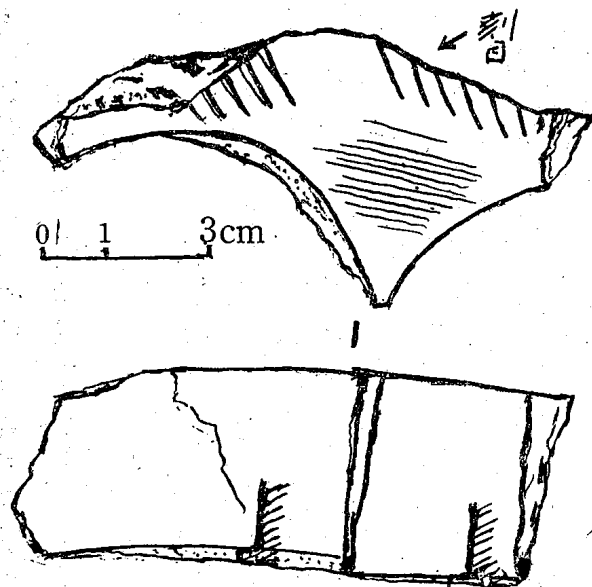
人士がいろくく想像をめぐらしているような原始的な方法で穿孔し得べきものとは全く認められる余地などない。その点で如上の内壁面に見る螺旋状の痕迹は鋭い一種の金属の利器を回転しての穿孔たることを現実に示すものに他ならない。従つて是等の既に一定化した観のある大形硬玉の所謂大珠は、よしやそれ等が縄紋式土器片と伴出したとしても、既にそのような金属器の行なわれた時代のものであるのをそれ自体が示すものでなければならぬ。金属器を用いた硬玉で作られた是等の大珠類は、そのような技術がこの国土に伝えられて以後の所産であること、これは玉そのものゝ形が大きくて、特色のあることも当然考えられるべきであらう。

この点で更に顧みられるのは、既に本文に触れた一部に当時是等の硬玉類が製作せられたとする越後長者ヶ原遺跡で蒐集された各種の未成品の示すところである。長者ヶ原の遺跡からは、なお問題の大珠の未成品のようなものは見出されていない様であるが、夥しい硬玉の破片は糸魚川附近原産のそれと同質であつて、同地で玉の製作が行なわれたことをよく示している。そして遺跡地が所謂縄紋式土器の中期の分布地区と重なることより推して、いまでは一般に古い所謂大珠の製玉所の一とせられていること周知の如くである。



第17図 越後長者ヶ原出土
硬玉未成品形状図

さてこの長者ヶ原遺跡の調査で出土した玉の未成品等はなお囑目の機会を得ないでいるが、幸に実物の一部を観ることの出来た国学院大学の樋口清之教授の蒐集に係るその硬玉片は、別に同教授蒐集の糸魚川原石と全く同質であつて、明らかにその地での攻玉の過程を示すものが含まれている。然るにその或片には、鋭利な利器で原玉を切断したことを示すものがあるのみならず、扁平な其の一片では、第一七図のように、両面に現実に鋭利な利器の回転に依る穿孔を中途でとどめたもの



第18図 奈良県朝利村古墳出土硬玉片形状図

があるのである。これはまさに上記大珠での内壁の螺旋状の形迹をのこしているそれと吻合するものとして注目されるのである。前者の鋭利な利器で直線的に切断されたのを示す遺片に於いても、それは嘗て奈良県旧山辺郡朝和村字岸田の荒墓之塚で大正九年出土した琅玕勾玉材とあるもの(辰馬悦蔵氏感)に於ける勾玉を切取つたと認められるそれと全く様相を同じくしている。即ち現長九センチ、厚さ三・六センチの青味のすくない材の片側に弯曲した勾玉の背を切取つた相連なるその面の工合は、長者ヶ平の直線的に切断したものと全く違っていない(第一八図)。

従つて長者ヶ原攻玉遺跡、所謂大珠と同時期と一般に認められている史前のそれと相違がないことが前提とされているが、技術の面で、目立つ大珠の遺好はこの国土え硬玉と造玉の技術が伝えられたのは早く史前の時代にあつた。即ち本州中部での縄紋式土器の行なわれが如きは実物の上からは当然止揚せられる可きであらう。而してこのことは、同じ珠玉が有名な亀ヶ岡等の遺跡で拾得されたものゝあること、また一部の人士が同じ類と見なした西日本の筑前遠賀郡芹屋町山鹿貝塚出土品が、既に指摘した如く、本文に云う魚形玉と認められることが、そのような年代観が如実に是正せられる可きを示すものでもある。

之を要するに本邦中部以北に於ける此の種大珠の遺好は、右の実物の示すところ、同地域での所謂史前の所産であるに問題はないとしても、本文で推測した如く、外からの硬玉の舶載がその造玉の技術と共に早くその時代にこの国に伝えられて、これが原始的な佩玉の間にあつて東方での目立つたものであつた。従つてその時代の如き右の見地よりして、固よ

り中国の同代よりも遡り得ず、個々の器にあつては西紀前後のものもあることが当然認められる可きである。

終りに大珠の造玉の時代に關聯してなお挙ぐ可き新たに知見に上つた一遺品がある。それは昨年十月入江喜太郎氏が収得して、將來した一個の碧玉品がまさに標式的な所謂鯉節形の完好品なることである(梅原保管)。この玉は長さ八・三センチの濃緑の碧玉で造られた磨研度の高いもので、丸い体の中央に鋭くほゞ等大の円孔が貫通、なお尖つた両端では交互に更にやゝ磨研された形迹をとゞめている。図版第二の下に載せた実大写真(第一四)が示すように、その形たるやまことに所謂大珠として最も標式的であつて、たゞ異なるのは質が碧玉であることと、碧玉の質なり其他が既に本文で挙げた大形禽獸形玉の諸品と全く趣を一にして、同種の上古の遺品として、またその丹後方面の出自たることを想察せしめるのである。所謂學術發掘の出土品のみを偏重する若い一部の考古学者の中には、出土地が不詳と云うので、或は疑問視するかも想われるが、実物には寸毫も疑う余地がない。されば此の碧玉の鯉節玉は所謂古墳の古い時代に作られたに相違あるまい。これはまさに本附説での現在での劃一的な所謂大珠の所論に就いての是正の上で重要な遺品と云う可きである。